爐開をする時に爐を修繕するか何かの爲め左官を雇ふたと見ゆる。其左官が既に老年で鬢が白髮になつて居た、それが如何にも寂びた爐開の趣にかなふてゐる處より、多少滑稽的に叙したのである。老いゆくといふから曾てより知つてゐた左官で、前々は未だ若くて鬢も黑かつたのであらう。白髮を霜に譬へる事は珍しくもないが、此處に爐開きの季節の冬げしきに思ひ寄せた點があるやうぢや。

熱田にて

しのふさへ枯て餅かふやごりかな

軒に生ひてゐる忍草さへ既に枯れて淋しくなつて居る、それに又餅を買つて喰つた、酒でも飲んで大に憂散をするといふ事も出來ず、さて〳〵淋しい此宿りではあるわいといつたまでゝある。

霜　後葎をとひて

花みな枯れてあはれをこほす草のたね

葎をとひてとは葎の有樣を尋ね見てといふ程の意ぢや。

秋草の花は皆な枯れて無くなり、其跡へ出來た實も今は早や地にこぼれ落ちてゐる、あはれに淋しい事ぢやといふを、種子といふ因みよりあはれをこぼすと曲をつけて叙したのである。是も少し異調の句ぢや。

苅跡や物にまきれぬ蕎麥の莖

田も畑もすべての植物が刈り盡されてゐる、其中に唯だ蕎麥の莖のみは赤くて他の苅株とはまぎれずに見られる、といふので、一面に刈られて何の穀類か何の草かわからぬ中に又た蕎麥の赤い刈株があるのは一種のけしきで、更に淋さを添ふるやうである。

旅に病て夢は枯野をかけめくる

旅中に病にかゝつて夢を見た、其の夢は枯野をあちこちと驅け廻つてゐる夢であつた、と旅中に病める身は一入心細くよるべもなく落付かぬ心持をよく寫し出して居る。

骨柴や斯くこ見るより蝶のから

刈つた柴の節々しく見ゆるを骨柴と云ふのであらう。其の骨柴を節節しいと眺めてゐると蝶々の殼が落ちてゐたと言ふだけの事で、裏面には人の亡骸などをも連想して生類のはかなさを感じた所もあらう。

大根引といふことを

鞍壺に小坊主のるや大根引

大根引は今日では冬季となつてゐるが、元祿の頃には未だ季節の物とされなかつたから斯樣に前書を加へたのであらう。

畑で大根を引拔いてゐる、傍に荷馬が居て其の鞍壺には小坊主が乘つてゐる、といふ客觀の事實で、畫に書きたいやうな田舍の景色である。

消息

口上に書落しけり土大根

人に手紙をやる其末へ書いたのぢや。

大根を人に贈つたが、口上には書くのを忘れてしまつた、此土のついた大根の事を、と言つて、何れむくつけな品物ゆゑッイ言ひ落しましたと戲れたのである。又た必ずしも大根を贈つたとせずとも、贈る筈のを忘れて贈らなかつて、それを戲れたのぢやとしてもよい。

兎角無頓着にして氣輕な處はよく其胸懷をあらはして居る。

玄虎子旅館にて菜根を喫して終日丈夫に談話す

ものくふの大根からき話かな

玄虎子は芭蕉の舊主藤堂家の人で、大臣である所から旅館と堂々しく言つた、其處で菜根即ち大根の類でも喰つて終日まするをに談をしたといふので、武家なる玄虎子や、其の召仕のさむらひなどと談話をしたのであらう。

武士の談話は何處迄も猛々しい固くろしい話のみする事である、折から大根を喰つたが其の大根は辛かつた、談話もそれと同じく辛かつたと興じたので、大方大根おろしでも喰つたのであらう。蓋し舊主の事なり舊武士朋輩の事であるから、此席上では芭蕉翁も暫く風流な世外談を止めて、專ら武道の心得などを述べたのであらう。して見れば大根辛きは其實己の事であるに、態と人の事のやうに言ひ做した、是れが矢張り辛いと云つて辛からず、眞面目中の滑稽である。此句が出て一座の君臣ドッと笑つた聲を聞くやうぢや。菜根を咬み得ば百事做すべしとは汪信民といふ支那人の格言。

菊のくち大根の外さらになし

菊の既に枯れた後ちには、畑に見るものは唯だ大根の青いのばかりで、其他には何物も更らに見る所なしと、前に菊の美しくやさしきものを見たのと後に大根のむくつけきものを見るのと比較して、打興じたので、其殺風景らしく云ふ中に又多少の景致あることをうたつて居る。

笠は長途の雨にほころび紙衣はとまり〳〵の嵐にもめたり佗つくしたる佗人我さへあはれに覺えけるむかし

狂歌の才士此國にたごりし事を不圖思ひ出て申侍る

狂句木からしの身は竹齋に似たるかな

被つてゐる笠は長い途中の雨に綻びてしまふし、着てゐる紙衣は泊り〳〵の嵐に揉めて損じてしまつた、佗の程をつくしにつくした此の侘び人たる自分は、我乍らもあはれに思はれる有樣となつた。昔しは狂歌の才士の竹齋といふ人が此國へ旅して來た事のあつた、それを圖らずも思ひ出たので此の句を申しますといふ前書で、雨風にうたれて或宿へつき其處に待つて居た人に向つてゞも言つたのであらう。

木がらしに出會つた自分の姿は、さてもよく昔しの竹齋の姿に似てゐる事よ、可笑しな姿に成り申した、といふのである。頭に狂句の二字を冠らせてゐるのは如何にも突然として穩かでない。二字を去て十七字にした方が調子の整ふのみか、其趣味も益〻深くなるのである。何となれば狂句と呼び出すよりは、呼び出さずして言外に狂句を認めしむる方が一層狂を盡す所なのぢや。併し彼は狂歌師我は狂句師ぢやと兩々對比せしめた積りであるか。又突然たる冒頭の一語を以て地下の竹齋に一驚を喫せしむるで謀であるか。

竹の畫賛

木枯や竹にかくれて靜まりぬ

木枯が吹いてゐたが、竹藪にかくれてしづまつてしまつた、今迄竹藪を吹動かしてがら〳〵と音させて居たのが收まつて靜かになつたといふのぢや。木枯といふ無形物が竹に隱れるとは、奇拔な理想で、一動一靜の景色が目前にあらはれるやうである。

冬枯や世は一色に風のおと

冬枯がして草木は皆な枯果て〻世間は唯だ一色の風の音ばかりとなり果てた、其他には何ものも皆無くなつてしまつたといふのである。

元來ならば冬枯や野は一色になどと客觀に打見た儘をいふ可きを却つて主觀に世と言つた爲めに、單に一の野原などの客觀に止まらず、天地山川草木禽獸悉く冬枯れして唯風ばかりといふ大なる詩想を現し得る。こゝらが僅かの事で大差を生ずるのぢや。作句者のよろしく留意す可き所である。

冬枯の磯に今朝見るこさか哉

冬枯のして淋しい磯邊に今朝見ると、こさかがあつた、と云つたので、こさかは鷄冠菜と書いて鷄の冠のやうな形をして又た色の赤いもの、萬物荒涼として色もない中に、唯一つの赤い海草を見るのは一層周圍の淋しみを增す事である。斯樣な一小物によりて全體の景色に生命を與へた所はさすが翁ぢやぢや。

木からしや頰腫いたむ人の顔

木からしが吹いて居る、頰を腫らした妙な顔をした人がある、其の人の腫らした顔が木枯に對しいとゞいたはしく見ゆる、又寧ろ面白くも思はれたといふだけの事である。

耕雪亭別墅にて

木枯に匂ひやつけし歸り花

何かの木に歸花が少し咲いてゐる、小春の頃なれど而かも木枯は吹いてゐる、其の木枯の幾分か匂ひある如く感ずるのは彼の歸り花がつけたのであらうか、と言つたのである。即ち木枯の吹きて歸花が咲いてゐるといふ客觀は其木枯に匂あるかに感ずるより、匂ひやつけしといふ理想的の觀をなしたのである。

三河新城の家士菅沼權右衞門宅

京に倦て此木からしや冬住ひ

家士とあるからは或大名の内の武士だらうが、何により見ると、既に隱居でもした人と見ゆる。其處で京に住むのを倦むで此木からしの吹く所に冬住ひをして淋しい所に暮して御座る事よと言つたので、裏面には此人の既に世を避け隱居して、閑散に風月を樂むでゐる事を賞讃したのである。時めいた仕官を京で現はし、今の閑居を木枯で現はした趣もある。又一解は芭蕉翁自身の事をいつたとするので、京から來て此人の宅に宿り閑寂忽ち所を換へたる情懷を叙した事と見るのぢや。

鳳來寺に參籠して

凩に岩ふきこかる杉間かな

鳳來寺は何處にあるか知らぬが、兎角岩などある小寺であるらしい。凩が吹いて其爲め岩が吹き尖がらせられてゐる、其岩が杉の木立の

間が見ゆるといふので、杉の林の間から尖つた岩角が見え、それに凩が吹いてゐる處は如何にも物凄い冬のけしきで、其山の如何に嶮にして又た其寺の如何に幽なるかゞ目に見ゆるやうである。やがて天狗なども出さうぢや。

多度の權現を過る

宮人よ我名をちらせ落葉川

多度の權現に仕へまつる宮人よ、我名を留めて居ないで散らせてたべ此川中へ落葉諸共に掃き落して無くしてたべ我名が存して居ては實に耻入るからといふ意で、想ふに宮人と語らふた時に宮人から名を聞かれ、松尾芭蕉で御座るといふと、客人はサテハ俳諧の宗匠一代の達人は貴殿でありしよな、とでも言つたので、イヤ實に左樣に申されては恐入る次第、といふ、折ふし風が吹いて權現の木立の木

の葉がちら〳〵と散り落つる、其下に川があつて、水のまに〳〵落葉の浮び去るのを見て斯樣に興じたのであらう。

多度權現は勢州桑名にあつて、落葉川も其處の川の名である山、それはどちらでも好い。

留守の間にあれたる神の落葉かな

舊十月には全國八百萬の神々が出雲に集つて會議を開かれるといふ言傳へがある、其の會議に列席せられる爲め諸國の神社は皆な御留守になる、それを神の留守といふので、御留守の間に如何にも境内が荒れたわい。落葉がアチコチと散らばつて居る、といふので、元來神の留守に荒れたる落葉かなとも言ふ可きを上下に分けて神の落葉と神の字を中へ使ひ留守を上に置いた處が措辭上の働きである。

大道庵主道圓居士芳名を聞こと久しきまゝに、まみえむ事を契りしに終に其日をまたす初冬一夜の霜ときえぬ今日は早や一めくりにあたりぬといふを聞て

其かたち見はや枯木の杖の長

大通庵主道圓居士といふ人の芳しき名を聞いてゐる事が久しい間であつた、一度は面會しやうと約束をして居たに、とう〳〵面會の日を待たずに、初冬の一夜の霜の如く果敢なく消え亡せて死んでしまつた。今日は早や其の一周忌ぢやといふ事を聞いて咏むといふ前書で、此の居士は少し先輩でもあつたか頗る愼重に述べてゐる。

其人の形は如何な形であつたか、見たいものぢや、此枯木の杖の長よ、此物によりて何となく其人の形が想ひ遣らるゝ、といつたのでいづれ道圓居士は老人であつたらうから杖に托して其風丰を慕ふ心を述べたのである。

大津を過る

三尺の山もあらしの木葉かな

大津は江州の大津であらう。打通る所の山は悉く木の葉に埋められて、三尺の間すらも嵐に吹き散らされた木の葉で埋めて居ると云つて、如何にも落葉の盛である事を叙したのである。三尺の山が面白い。

月の澤と聞えける明照寺に旅の心をすまして

尊かる涙やそめて散紅葉

月の澤と言つて世間に聞えてゐる名高い明照寺に旅愁を拂ひ其心を清く澄ましてといふ前書。佛を尊く思ふよりわき出る涙が染めなして彼の散る紅葉の赤い色となつたのであらう、と理想的に打興じて寺内の景色を賞する心をも現はしたのである。又一解は尊かるは尊

くあるで、佛の涙は佛の慈悲の涙と見るのぢや。

當寺此平田に地を移されてより既に百年に及ぶとかや

御堂奉加の辭に曰竹樹ひそかに土石老たりとまことに

木立物ふりて殊勝に覺えたりければ

百年のけしきを庭の落葉かな

前書の當寺とは矢張り前の明照寺の事であらう、明照寺は以前は他の處に在つたので、後此の平田といふ所へ移つたのぢやが、それも既に百年の昔しである由、其の移轉の時に御堂を建立する淨財を募つた其の奉加の辭に、竹樹が密に茂つてゐて土や石も老い古びてゐるとあるが、誠に其句の如くで、其あたりの木立の樣が如何にも物古く寂びてゐて殊勝な地ぢやと覺えられたから、といふ前書である。既に經來りたる百年もの景色が庭の落葉のさまに現はれてゐる、古

い寺ぢや尊いことぢやと言つた位の事。

惠比壽講酢賣に袴きさせにけり

商人の宅で商買繁昌する爲めに惠比壽講といふ宴を十月に於て催す俗習がある。其の宴席に酢賣が來た、それにも袴を穿たせて、お客の席に坐らせたか或は何か藝でも演じさせた、常は股引の酢賣が、今晩は袴を着て鹿爪らしい姿になつて居た、それが可笑しと興じたので、酢賣を捉へたのは一寸面白い。職人歌合の繪も思出さるゝ。

振うりの雁あはれなり惠比壽講

惠比壽講の時には多くの商人が宴席を張るので、雁なども店で賣るのみならず、町々をあちこちとふり賣をして歩行く、其處を見て振賣をしてゐる雁は如何にも哀れげに見ゆる、此の惠比壽講の頃には、と言つたので、雁が首うなだれて行商人に提げられてゐる樣ぢ

や。又一歩すゝめて夫れをあてもなくふり賣してゐる商人もあはれ尙又た周圍の寒げな景色もあはれに見えるとしても好い。

菊鷄頭きり盡しけり御命講

法華宗徒が日蓮上人の忌日を修するのを御命講と言つて、十月に於て行ふ佛事である。其の御命講に日蓮を祭る可く香華をさゝげる、其の花として菊も鷄頭も皆な切り盡して、悉く供へてしまつたといふので、御命講の盛んなのを季節の菊鷄頭を藉りて現はしたのである。尤も其趣味は御命講其物の盛んなるに屬せずして、寧ろ其時菊鷄頭を切盡したといふ事に屬ずべきは言ふ迄もない。

消息

御命講や油のやうな酒五升

友人に消息をやつた時の句。

頃は御命講の時分ぢや、彼方此方の信徒共が寄集まつて盛んに題目を唱へ其席には油のやうな上等の酒五升も樽にたゝえて居る事であらう。といふのを現在見た如く歌つたのである。而して裏面には消息した其人に向ひ箇樣な美酒をドコからか獲たいものぢやとほのめして居る。油のやうな酒五升とは日蓮の書に新麥一斗笋三本油のやうな酒五升南無妙法蓮華經と回向いたしたとある由。

訪草庵

冬庭や月もいとなる虫の吟

或人の庵を訪ふての句で、其の庭は冬枯れの庭で淋しい、折から月も糸の如く小さく微かで、虫の音もしてゐる、淋しい景色ぢやと言つたのである、糸なるは重に月にかゝるが暗に虫にもかゝつてゐる。

冬籠又よりそはむ此はしら

是より冬籠するのであるが、又た例の通り此の柱によりそひて一冬を送らうといふので、何事もなく言つてある所が冬籠の興にかなひ柱によりそふなど、冬籠らしく、氣に入つた句ぢや。

金屏の松のふるひや冬籠

金屏が立てゝあつて、それには松の繪が書いてあり、松も古さびた趣に見ゆる、其屏風の立てゝある間に冬籠する、といふので、冬籠もさまゞゝぢやが是れも一の面白き場合である。若し屏風の松の古びのみならば唯だ淋しき一方なれど、其松は金泥の屏風と言つたのであるから、淋しい盡しの消極のみならず、多少積極的の景致もあつて、却つて冬籠の趣が引立つ事になつてゐる。配合に意を用ふ可き處は實に斯樣な處である。金屏とあるからは芭蕉翁の庵でなさゝうぢやが、或は人から借りた屏風であらうか、芭蕉翁の仕物としては、

少しく贅澤すぎるやうに思ふ。(古びたにせよ)

贈洒堂

湖水の磯をはひ出たる田にし一匹蘆間の蟹のはさみを
恐れよ牛にも馬にもふまるゝことなかれ

なには津や田螺のふたも冬籠り

湖水の磯を這い出た一匹の田螺よ、蘆間の蟹のはさみを恐れてゆめ
それにはさまれな、又た牛や馬にも踏まれてはなるらぬぞ、心せよ田
螺といふ前書であるが、暗に田螺を以つて洒堂に比し、江州男よ、
折角奮發して世間へ出たのであるから、此上にも力めて邪道に入ら
ぬやう、又た人にも負けぬやうせよと、いふ意を暗に諷したのであ
るらしい。

難波津や、難波津では田螺も蓋を鎖して冬籠してゐる事ぢやと、さく

やこの花の古歌を飜案したのぢや、洒堂は其頃難波に住してゐた處
から斯樣に興じてやつたのかと思はれる。

權七に示す

舊里を去つてしばらく田野に身をさすらふ人あり家僕何
がし水木の爲めに身を苦しめ心をいたましめて其獠奴阿
段が功をあらそひ陶侃か故奴をしたふ誠や道は其人を取
る可からず物は其形ちにあらず下位に在ても上智の人あ
りといへり猶石心鐵肝たゆむことなかれあるしも其義を
わする可からず

先祝へ梅をこゝろの冬籠り

權七といふ人の僕に就ての句と見え、序の意は舊里を去つて暫らく
田野の間に身をさすらへ佗しく暮してゐる人がある、其人の家の僕

なる何某が水を汲んだり木を樵つたりする事の爲め身を苦め心をいたましめてよく主人に仕へて居る、其有様は昔の獠奴阿段といふ者と功を爭ふべく、陶侃が家の故奴が行跡を慕ふものといつて宜しい、誠に然り、道の有無は人だけで取捨せられぬ、物の用否は形だけで定まつては居ぬ、下等の地位に在る者でも上等の智識を持て居る人がある、と言ひ傳へてあること、今思ひ當つたことである、猶此後も其僕が石の如き心鐵の如き肝は撓むことないやうにありたい、其主人も亦其僕の忠義を忘れてはなるまいと、縷々述べ去つたので、芭蕉翁も餘程此事に感じたものらしい。

何の意は先づ今から祝つて置くがよい、梅が咲くのを心に樂みとして冬籠りして居る方々よ、其内必ず回る春があるからといふので、一面には今の逆境を慰め又一面には其好運を祈て居る心持がある。

千川亭に遊びて

折々に伊吹を見てや冬籠

千川亭は江州の伊吹山が見えるあたりにあつたと見ゆる。冬の事なれば戸を閉じて冬籠をしてゐる、併し折々は戸をあけて伊吹山を眺めるであらう、君はおもしろい冬籠をして御座るわいと、折ふしの時節に就て主人に戯れたのである。

防川亭にて

香を探る梅に藏見る軒端かな

梅の香、がするから梅の木があるだらう、それを見ようと障子でもあけて向ふを見ると、先づ目に入つたのは土藏で、さうして梅も咲て居る。其梅と土藏との配合が妙ぢや、といふ位の事。

熱田梅人亭塵裡の閑を思いよせて

水仙や白き障子のさもうつり

伊勢の熱田なる梅人といふ人の亭で、人が職業に忙しく常に塵の裡に居ながら其間自ら閑日月があるといふ事を思ひよせて作るといふ前書。多分主人が左樣な人であつたのであらう。

句意はそこに水仙が咲いてゐる、又新たに張つた白い障子がある、水仙の白と障子の白と、互ひに白同志が映りあつてゐるといふ意であらう。何となく皎潔な趣が見える。而して裏面には塵裡に在つても胸中の閑は斯くの如く皎潔なるべしとの意をほのめかしたのである。又ともうつりとは芭蕉翁と主人との肝膽相照らしたといふ心持もあらうか。

三河にて白雪といへるもの〻子二人へ桃先桃後の名を與へて

其匂ひ桃より白し水仙花

三河の白雪といふ人の子二人へ一人へは桃先他の一人へは桃後といふ號をつけてやつたといふ前書。

其匂ひは桃の花よりも白い、アノ水仙の花はと、水仙を稱へ、暗に兄弟二人の前途に比して其訓誡を垂れたものである。即ち水仙の咲くのは冬であるから、其年で云へば桃の後ともいふべく又翌年に對すれば桃の先ともいふべきものであるからであらう。此桃は白い花の桃で又匂ひとは鼻に嗅ぐ香のでなく、眼に映る色のことである。

さし籠る葎の友や冬菜賣

葎の宿にさし込もり居れば、友として來るものは冬菜賣ぐらいぢや、と自己が冬籠の佗びしき情懷の叙寫である。

此里をほひといふことは昔し院の御門のほめさせ玉ふ

地なるによりてほう美といふよし里人の語りはへるを
いづれの文に書とゞめたるともしらず侍れどもいとも
かしこく覺えはべるまゝに

梅つばき早咲ほめむほみの里

此里をほひと云ふのは昔し院號稱せらるゝ御門即ち太上皇が好い土地ぢやと褒められたことから其褒美といふのを言葉をつめてほひといふよし里人が語つて聞せた、それは何れの文に書留めてあるかは知らぬが、いとも畏こい事に思つたからといふ前書ぢや。句の意味は梅や椿の早く咲いたのを褒めてやらう此のほみの里でといふだけで、ほみといふよりほめむといふ趣向を起したのぢや。又表面は梅椿を褒めてゐるが、裏面には昔し御門の此地を褒められたとある其叡慮を賛成し奉つた微意もあらう。

打よりて花入さくれ梅つばき

一人でなく大勢皆々打集つて花入が何處にあるか探して來よ、此通り梅や椿があるから、といつたので、即ち梅椿を一緒に生けて、皆皆で愛でようぢやないかといふ意である。此句の言葉つきより見ると芭蕉翁が同門幾人かと連立ちて郊外散歩に出かけ梅椿など見た時の句であらう、家の内に居た場合の句としては打よりてとかさぐれとかいふ言葉つきが解し難いと思ふ。

寒菊や粉糠のかゝる臼のはた

寒菊が咲いてゐる、其場所は粉糠の散りかゝつてゐる臼の側であるといふので、寒菊と粉糠かゝりし臼との配合は頗る趣があつて畫にでもして見たいやうぢや。

池下の茶店にて

松葉を焚て手拭あふる寒さかな

松葉を掻き集めそれを焚いて手拭のぬれたのをあぶつた、寒い事である、寒い時節である、といふので、火鉢の設けなどもなき田舍道の茶店の趣がよく現はれて居る。

吉田の驛にて

寒けれど二人旅寢はたのもしき

同行二人で東海道吉田驛へ宿したと見ゆる。寒い事であるが二人で旅寢をすること故自ら心丈夫で氣も慰み、即ち頼もしい、といつたのに過ぎぬ。

綿弓や窓に入日の影寒き

綿を打つ弓弦の音がピン〳〵と響く、其音の出る家に窓があつて、入日のさす影が寒いと、外から打見てのけしきであらう。

三河國鳳來寺に詣る道の邊より例の病ひ發りてふもとの宿に一夜あかすとて

夜着一つ祈り出して旅寢かな

前書の例の病といふは芭蕉翁の事なれば疝氣ぐらゐな事であらう、それが爲め鳳來寺へ登山し得ず、其の道の麓の方で一晩宿つたといふのである。

寒さの時分の事であるから、旅寢するには夜着が一つ欲しい、其夜着を法力を以て祈り出してそれを着て旅寢をする事ぢやといつたつて、折節鳳來寺の麓であるから、戯れ興じたのである、斯く侘びしき旅の病床にも老人中々元氣が好い。

李下が妻の悼

かつきふす蒲團や寒き夜や凄き

打かついて臥す蒲團は寒からう、又た夜分は凄ごからうと妻を亡つた李下の心中を推し料つてそれに同情を寄せたのぢや。且夜や寒き衣やうすき云々の古歌を暗に地口つて居る。

元起和尚より酒を賜りけるかへしに奉りける

水寒く寢入かねたるかもめ哉

元起和尚は尊い僧と見えて賜りけるとか奉りけるとか敬語を用ひてゐる。

冬の夜のことなれば水が寒くて寢入らんとすれど寢入かねてゐる鷗よと、歌ひ、而して裏面には自分が寒き夜に寢入かねてゐるといふ事を訴へ、斯かる場合へ酒を下さつて誠に難有い、御蔭で一杯あたゝまつて寢ることで御座るといふ謝意を述べたのぢや。

仙化が父の追善

袖の色よごれて寒し濃鼠

袖の色が穢なくよごれて寒く思はれる、其の寒く思はれる袖の色は濃い鼠色ぢやといふので、仙花といふ人が久しく父の喪に籠りて喪服をつけ、其の喪服も既に垢つきて見えるのが如何にも寒けく又た佗しく思はれる、誠に氣の毒の至りぢやと同情を寄せたのである。

鹽鯛の齒莖も寒し魚の店

鹽して干した鯛の齒莖がむき出でそれが如何にも寒く思はれる、魚の店に於て、といつたので、成程干からびた鹽鯛の齒莖は左樣の感がある。冬季魚店の前などによくある景ぢや。齒莖ものもは言葉にゆとりをつけるまでの事。

葱白く洗ひ立てたる寒さ哉

葱を洗つて今ま洗ひあげたのが白い、其白さを寒く感ずるといふの

で成程是も實況ぢや。

熱田にて

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

熱田は入海で、其入海に日が暮れて鴨の聲が微かに白いといつた。聲が微かに白いとは一寸解し難いが想ふに日は西嶺に沒し乍らも海は充分に暮れ切らず、夕日の反射が殘つて水の上のみは何處やら闇い中にも白く思はれるといふ場合に、其の海上に鴨が鳴いてゐる、其處で鴨鳴き日暮れ海かすかに白しといふ可きを鴨の聲が白いと云つて、鴨の浮ぶ海上の白い意を現はしたので、言葉を面白く操つたのぢや。兎に角句の全體が茫然として定かならね處が却て夕ぐれの景色に相當してゐる。又た調も字餘りならねど句ぎりの所が普通の句とや〻趣を異にして、芭蕉集中稀れに見る變つた調子である。

桑名古益亭にて

冬牡丹千鳥や雪のほこゝきす

冬牡丹がさいて咲いて千鳥が咲いてゐる、其千鳥は雪のふる頃のほと〻ぎすと見なしてよい趣ぢやと言ふので、想ふに桑名は入海のほとりなれば、冬牡丹は家に咲き海上に千鳥が鳴いてゐた有樣を斯樣に言つたので、夏の牡丹頃には時鳥を聞くものなれば、今ま此冬に牡丹が咲いてゐるに對しては彼の千鳥こそ時鳥の代りなれ、といふ意味である。而して雪の時鳥とは冬の時鳥と言つても好い處を折柄雪もちらついて居たから個樣に景を添へて言つたのであらう。又千鳥の羽の白い處に比擬した心持もあらうか。要するに事柄と云ひ句調と云ひ混雜して居て、且つ多少の厭味を免れぬ趣向ぢやと思ふ。

一匹のはね馬もなし川千鳥

川のほとりに川千鳥が鳴いてゐる、其のあたりは總て寂寥たる景色で、一匹のはねる馬も見受ず、即ち旅行の人もないといふ意ぢや。想ふに街道に沿うた川の夜景で、晝ならば行人征馬の來往して馬嘶き人騷ぐ場所なれど、夜に入りては總てが止んで唯々千鳥の鳴く淋しい景色になつたといふ心持ぢや。一匹のはね馬もなしとは奇拔な言い方である。

ねざめは　松風の里　呼續は
夜明てから　笠寺は　雪のふる日

星崎の闇を見よとや鳴千島

寢覺の時には松風の里を通り、呼續といふ所は夜明けてから通つた、笠寺へ着いたのは雪の降日であつた、と木曾路を經て東海道に出た經過を淸少納言の枕草紙などの文句に似せて書いたので、一寸洒落

れた前書ぢや。

星崎の闇を見るべしといふのか、アノ鳴く千鳥よ、汝千鳥は我れに此の闇夜の景色を紹介するものゝやうぢやといふので、次第に旅をして行く情況を叙し前書の續きとした心持である。

杜國を訪ひける道すがら

鷹一つ見つけてうれしいらこ崎

杜國といふ人を尋ねる道のほどで作つたといふ前書。鷹を一匹見つけてうれしい伊良古崎といふ土地で、といふので、途中の實況を即吟したのであらうが裏面には鷹を杜國に比した意もあらう。

氂につくみてぬくし鴨の足

鴨は足の短いもので、足の處にはふさ〳〵とした深い毛が生ひてゐる。其の毛を毛衣と見て、斯樣な毛衣で足を包んで居て暖かい事ぢ

やと言つたに過ぎぬ。

杜國が不幸を伊良古崎に尋ねて鷹の聲を折ふし聞きて

夢よりもうつゝの鷹そ頼もしき

杜國が不幸にして親族を亡くしたのを伊良古崎へ見舞に行つたが、折ふし鷹の聲を聞いたからといふ前書である。是れによると杜國は伊良古崎に居たと見える、從つて前の鷹一つの句も伊良古崎近邊の句であらう。

夢で聞くよりも現在に聞く鷹の聲が更に頼母しい、即ち覺束なきよりかも明白なる方が心丈夫に思はれる、といふので、裏面には杜國が親戚を亡ひて其の人が夢にのみ現はれるが、寧ろ現在に見たらば滿足であらうにといふ同情を歌つて居るのぢや。

あまつ縄手にて

すくみ行くや馬上に氷る影法師

折から荷馬か何かに乘つて縄手を行く時と見える。馬上に於て寒さに堪へず殆んど氷るやうな心持がする爲め、小さく身をすくめて乘つてゐる、其のすくめて乘つてゐる影法師が地に落ちて自分の目に見える、其の影法師と來たら我乍ら可笑しい、サテも寒い旅ぢやと興じたので、冬の旅路に有りさうな事、而かも面白い見付け處でもある。

生なから一つに氷る海鼠かな

生きた儘で一つに固まり氷つてゐる海鼠ぢやといふので、海鼠が數多く一つの入物に入れてある、折から寒さの節でそれが一緒に固まつてゐるのを見て興じたのである。よく海鼠を形容してゐてをかしい。

范蠡がちやうなんの心をいへる山家集の題にならふ

一つゆもこほさぬ菊の氷かな

范蠡がちやうなんとは越王勾錢の臣范蠡が勾錢の爲めに呉を亡して後は、功臣が用がないから或は殺さるゝ事もあらんかと思つて、其等の難を逃げて五湖に浮び終りを令したといふ。其の逃難の心を西行の山家集に題として歌をよんでゐる、自分もそれに倣ふてといふ前書。

打見ると菊に置ける露は早やくも氷つてゐる、其爲め一露といへどこぼれずに全く露の儘に氷となつてゐるといふので、寒菊の有樣を表面に叙して、其裏面には一の遺算もなく、功成り名遂げて世を逃れてしまつた范蠡の心をほのめかしたのである。

芹燒やすそ輪の田井の初氷

芹を燒いて喰ふ、其時がすそ輪の田井即ち麓のめぐりの田水に初氷のある時である、といふに過ぎぬ。

瓶われる夜の氷のねさめ哉

氷の張りつむ時は水が膨脹する爲め水を入れた器の割れる事がある。其の音を夜中に聞いた時の句と見えて、瓶のわれる音の爲めに驚かされ寢覺めしたといふ意である。叙寫法が巧みぢや。

十二月九日初雪降の悦び

初雪やさいはひ庵にまかりある

初雪が降つた、幸ひと自分は庵に居りまする、といふので、言外には誰れか來て下さい、共に此好景を玩ばうといふ意がある、罷りあるが此句の興で、手紙文のやうに戯れてゐる所が可笑しい。

曾良何がしは此あたり近くかりに居を卜て朝な夕なに訪つ

訪はる我くひ物いとなむ時は柴折くふるたすけとなり茶を
煮る夜は來りて軒をたゝく性隱閑を好む人にてまじはりこ
かねをたつ或夜雪に訪れて

君火をたけよきもの見せむ雪丸け

曾良といふ號で何がしといふ姓の男は此の近處に假りに居を定め朝夕に訪ひ來れば又此方からも尋ねる、自分の炊事をする時は柴を折つて竈にくべる手助をし、茶を煮る夜分などは尋ねて來て軒を叩いて音なふ。其性質は隱れて閑を守る事を好む達ぢや。二人の交情は所謂斷金の中である。或夜雪が降つたのに例の如く訪ねて來たといふ前書。

君は火を焚いてくれ、よい物を見せてやらう、それは此庭の雪まろげである、といふので、佗ひ人の交遊の氣輕い所があらはれてゐる

のみか、焚火の明りで庭の雪を見る二人の形も目前に現はれるので、畫景としても頗る感じが好い。

初霜や菊冷初る腰の綿

菊を寒にいたはりて綿をきせる事がある。初霜が降つた、菊もこれから冷え初めるのぢや、それで腰に綿を着てゐるといつたので、裏面には矢張り年よりの境界をほのめかしたらしい。

抱月亭にて

市人にいてこれ賣らむ雪の笠

市に居る人にいでや此品を賣つてやらう、雪の付てゐる此笠を、斯樣なものは却つて市人には珍らしからうよと言つたのである。抱月が市井に住みて有福な商人であつた所から、個樣に戯れたのであらう。

おもしろし雪にやならむ冬の雨

面白い事ぢや、雪になるだらう、此の冬の雨の有様ではと、氣輕に興じたので、雪をめづる雅人の心には寒さは何ともないと見える。

杜國亭にて中あしき人のことなど取つくろひて

雪こ雪今宵師走の名月か

杜國の宅で何か俳友などの間に物言ひがあつた、それを芭蕉翁が說諭して仲直りさせたといふ前書ぢや。

師走即ち十二月も早や末になつてゐたものらしく、折から雪が降つて、一面に積つてゐる、その彼しこの雪とこゝの雪とが今宵互ひに照り合ふさまは恰も師走に於ける名月といつてもよさゝうぢや、と雪あかりを月あかりと見なして咏じたので、裏面には甲乙間の互ひの心が解け合つて今宵こそはれはれとしたであらう、といふ意を含ませて居る。

箱根こす人もあるらし今朝の雪

今頃に箱根八里の山路を越して行く人もあるであらう、今朝は此通りの雪である、さぞ嘸かし難儀であらう、併し又景色はよからうと言ふ位の意ぢや。表面は單に箱根を越す人を思ひやつたのみの如くであるが、實は雪の朝に旅人が箱根の嶮を越ゆるといふ景致をも眼前に畫いて見たのである。

ためつけて雪見にまかる紙衣かな

ためつけては何れの地方かの方言であらうから少し解しがたいが、事實の上から想像するに、紙衣の最早古くて皺クチャになつたのを引のしため直すといふ程の意ではあるまいか、雪見に行くので紙衣ながらも幾分か衣紋をつくろふて出かけると興じたのであらう。

旅人を見る

馬をさへ眺むる雪のあしたかな

平常は馬などは眺めに入らぬ、それさへ面白く眺められる此雪の朝であるかな、雪にはあらゆる物が面白く眺めらるゝといふのである、前書には旅人を見るとし、句に於ては馬を眺めてゐる。さらば旅人は馬に乘り行きつゝあるのかとも思はれるが、穴勝ち左樣せずともよい。即ち句の方にては單に馬のみを見た趣としてよいのである。然らば前書の旅人に此句が如何樣の關係があるかといふと、旅人を見ても常には何等の趣がないが、雪中を行きつゝあれば自ら面白く眺めらるゝといふ事を、馬に依つて現はしたので、馬さへ眺めに入るものを況て人をやといふやうな心持を裏面に句はせたと見るのぢや。

兎角さへの言葉は理屈ポクて拙句の部。

深川八貧の中

米かひに雪の俗や投頭巾

深川に住む時の貧乏な有樣を八箇條として咏むだ其中の一つといふ前書ぢや。他の七箇條に就ても作句したのか否かはわからぬが、兎角これが其八貧の一つであると見ゆる。

俗をさげて米買ひに出るといふ事既に貧乏な有樣であるが、折ふし雪が降つたので、其米包む可き俗を頭へ投掛て頭巾の代りにしたと言ふので更に一層の佗しさが現はれた。又米を買ひに出る雪が降る俗を投頭巾にするといふので無雜作な所作も見え、氣輕い佗び人の境涯も善く現はれてゐる。米かひに行くと雪の俗の雪とはかけ詞ぢや。又昔し支那の陶淵明は頭巾で手づくりの酒を濾して、頭巾にもなれば酒濾す布にもなつたといふ事があるが、多少それ等を氣取つた所もあるのであらう。

寒山白畫賛

庭掃て雪をわする〻箒かな

寒山拾得と並稱される禪家で、其寒山の僧を自分で畫いて、且つそれに自分で賛をした。

折ふし庭に雪が降つてゐた、庭に下り立ちて箒で掃いた、掃きつゝも其雪であるか何であるかを忘れてしまつたといふだけの事で、寒山の畫は常に箒を持つてゐる所から、箒で掃除する事を言ひ其萬事忘却したさまは暗に禪機をほのめかしたのである。

閉居箴

酒のめはいこゝねられねよるの雪

閉居をしてゐる場合の戒の爲めによんだといふ前書。

酒をのむと常よりは殊に寢られぬわい、此の夜分に雪の降る時は、

酒を飲んだのが累をなして寢られぬのぢや、酒など飲み過ぎぬやうせねばならぬといふ事であるが、是れも餘りに深く道德的に見ずに、一寸あさく打興じ、いつも酒のめばよく寢られるのが、今夜はどういふ譯か却つて寢られぬ、折ふし、雪が降つて來た所から愈〻寒い、コリヤしくじつたと悔ひた位の事と見るが好い。

鳴海驛美言亭にて

京までは未た半空や雪の雲

鳴海は東海道中の驛名、其處の美言亭といふで作るといふ前書ぢや。

江戸より京部まで行く途中と見えて、江戸を立てこゝまで來たが、京までの路程では未だ半分ばかりしか來ぬ、折ふし雪を催しさうな雲が出たわいと言つたのである。半途といふ可きを半空としたので、

是れより行く可き遙かの空を眺めやる心持を含み、又た雲といふにかゝる可くたより善き言葉となつた。

熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

熱田の宮の御修覆があつた頃參詣しての句。

神前には常に鏡が掛つてゐるもの、それが御修覆につき磨き直はされたと見え、如何にも清く拜せられる、折ふし雪が花の如く降つて來たといふので、神鏡と雪との配合は如何にも淸淨で、且花とちる雪が其鏡に映るやうなけしきも想像される。

去年の佗寢を思ひ出てゝ越人に贈る

二人見し雪は今年も降りけるか

二人去年見たところの雪は又た今年も降つたであるか、アノ雪中の事が思ひ出さるゝといふだけの事である。

憶信濃羈旅

雪ちるや穂屋の芒の刈殘し

信濃の旅行中の事を回憶して作つたといふ前書で、雪がちら〳〵と吹き散つてゐる、芒の穂で小屋を作るが、其芒の刈り殘しがそこにあるといふので、其穂屋も近傍に見えてゐるのであらう。尤も穂屋とは諏訪の神事に關する假屋の事ぢやといふ說もある。さすれば穂屋は見たのでなくて想像したのぢや。いづれにしても好い感じのする句である。

いさゝらは雪見に轉ふこころまて

いざや、さやうなら、雪見に參らう、道でころぶと儘よ、ころぶ處まで參らう、此雪を家に籠つてゐられるものか、是非出かけやう。

雪に轉ろぶも風流ぢや、と打興じたのぢや。想ふに大雪か何んかで誰れかゞアブないから御見合せなさいとでも言つた場合に斯く戯れたもの歟。何さま芭蕉翁の面目が活きて居る。

山中に子供と遊びて

雪の日に兎の皮の髭つくれ

雪が降るよ、此日に兎の皮の髭を作るが好い、といふので、如何にもたわいのない言ひ草ぢやが、それが子供と遊ぶ心なのである。雪のフサ〳〵と降つて居るのは恰も白い兎の毛に似てゐる處からそれを兎の皮へ植ゑつけて一層美しい兎にして遣らうぢやないかといふ位の事ぢや。毛といはず髭といつたのは態と子供らしい言葉を用ひたのであらう。實際そこに兎を飼つてから此冗談も出たのであらう。

元祿巳冬奈良大佛再興

はつ雪やいつ大佛の柱たて

初雪が降つてゐる。何時大佛殿の柱立てをするのかといふのぢや。大佛殿と雪景とは面白い配合で、而かも建築中の大佛殿である爲め一層面白い。

初雪や聖小僧の笈のいろ

初雪が降つてゐる、聖即ちよい僧と小僧とが笈を負つて歩行きつゝある、其趣が面白いから笈のいろと言つたので、笈にも多少雪ふりかゝりて白を點して居るところより旁々いろの字を着けたのであらう。

おのが音の誰人となん世に沙汰せられて老の後志賀の里に隱れ侍しとなり今大津松本あたり智月と云老尼の許に尋ねて斯る事など語り出でけるついで面白ければ

少將の尼のはなしや志賀の雪

昔し少將の尼といふ人が己が音の誰人云々といふ歌をよみて世に取沙汰されて評判となつたが、年老ひて後に江州志賀の里に隱れ住んでゐたといふ事で、今ま大津の松本あたりに住んでゐる智月尼を訪問した時其事を語り聞かせられた、少將の尼もゆかしく、智月尼も亦た少將の尼に似て居るなど思ひ出で、其關係が面白いから咏むといふ前書である。

昔しの少將の尼の事蹟に就て話しが出た、折ふし志賀の里は雪が降つてゐるといふので、風雅な尼の話と雪とが既に配合の面白いのに且つ其雪が志賀の里であるから殊更ら趣味があるのぢや。

湖水眺望

比良三上雪さしわたせ鷺の橋

近江の琵琶湖の眺望と見える。

比良は湖の北方に在る山、三上山は東北方に見ゆる山、何れも湖邊に聳ゆる山である。兩方に此の三ッの山があつて、中間に湖が水を堪へてゐる。其の湖上に折柄白鷺が飛で居たのを雪と見立て、鵲の橋といふ故事より雪の鷺の橋と呼びそれを兩山の間へかけ渡せと興じたのである此句の雪は理想的雪で他の句の實物の雪と違つてゐる。

大雪や婆〻一人住む籔の家

大雪が降る事ぢや、此の大雪の中に婆が一人アノ籔の中の家に住んでゐるといふので、實際斯樣な事實があつたのであらうが、何となく婆の爲めに心細く思ひ遣り姨捨の籔とでも云ふ感じを持つたのぢや。

三秋を經て深川の草庵に歸りければ舊友門人日々にむらが

り來て如何にと問へば答へはべる

こもかくもならでや雪の枯尾花

三年の間他へ旅して深川の庵へ歸つた所が、舊友や門人が毎日々々群集して訪ねて來て、御旅中は如何で御座いましたかなど問ふ所から、左の句を作つて答へたといふ前書ぢや。

ともかくもなつてしまふべきにながらへてゐるらしい、雪中の枯尾花といふので、暗に自己を枯尾花に比し雪に霜に、いろ〳〵旅に困んだから疾く御目度くなつてしまふはずぢやのに、なぜかまだ息がしてゐますと興じたのぢや。

日頃にくむ鴉も雪のあしたかな

鴉といふもの頗る興なく日頃は憎く思つてゐるが、其れも雪の朝だけは何處となく趣があるやうに感ずるといふのみで、馬をさへの句と共に頗る素人くさい着想である。

小町畫賛

たふこさや雪ふらぬ日も簑と笠

尊い事である、雪のふらない日も矢張り簑と笠とをつけてゐられる事ぢや、といふので佗び人は十二一重などよりは却て簑笠の姿を難有く思ふのである。此句で見ると小町の畫といふは、小町の既に落魄して後ちで彼の卒都婆小町といふやうな畫と見ゆる。

草庵に士あり

木枕のあふらぬくふや夜の雪

或る草の庵に士君子が住むでゐる、其れを思ひやりて作るといふ前書。

木枕を常にすけるので油ぎつてゐる、其の油を拭つてゐる、折ふし

夜で雪がふつて居るといふのぢや。如何にも佗ひしい生涯が現はれてゐる。併し或は他の事ならず、夫子自ら道ふのかもしれぬ。

深川大橋半ばかゝりける時

初雪やかけかゝりたる橋の上

江戸深川の橋を架けるので、半分だけ出來上つた時に咏むだといふのぢや、初雪が降つたそれが架けかゝつて未だ落成せぬ橋の上に、ちらばり或は積んだ、と目擊の儘を叙したので、成程廣い川に半分だけ架かつた橋に雪の降つてゐるなどは一寸よい景色ぢや。

初雪や水仙の葉のたはむほど

初雪が降つた、水仙の葉にそれが積んで撓むほど降つたといふので、初雪は澤山降るものでなく、又た水仙はやさしい植物である所から、雙方を配合したのである。但だ注意す可きは此句は矢張客觀の眺めで、水仙の葉に雪が少しかゝりて撓んで居るといふ畫にでもかげる景を現したのが主眼ぢや。初雪の降つた程度を水仙の葉で量つたといふが如きは言葉のあやつりに過ぎぬのである。

竹の畫賛

たはみては雪まつ竹のけしきかな

竹を打見るに、其梢は撓むで幾分か斜に成つてゐる、其樣が恰も雪が此身に積れかしと待つてゐるやうである、左樣な竹のけしきであると言ふのぢや。

湖水から光り出しけり比良の雪

比良の山に雪が白く積つて光り照つてゐる、それは湖水の光から磨かれて斯く光り照るのである、と理想的に興じたのぢや。

霜月のはじめ武江に至る

都出て神も旅寢の日數かな

霜月即ち十一月の最初に武藏の江戸へ行つたといふ前書。

都を出てから神樣達も旅寢の日數を重ねられる事ぢや。神樣達は皆な十月に出雲の大社へと旅立たれたので今歸らるゝまでは長い旅寢を重ねられる事ぢや、と神に就いて歌つて、裏面には自分が旅寢を重ねて、やうやく江戸へ歸つて來たといふ意を含ませたのである。

深川大橋成就せし時

有かたやいたゝいてふむ橋の霜

有がたい事ぢや先づいたゞいてから踏んで行く此の橋の霜はといふので、即ち太平の御代なればこそ斯樣な大川にも橋が架けられて、吾々も渡舟呼ぶ面倒もなく、安々と渡る事が出來る其恩澤の難有いといふ所より、橋の霜も勿體なく思はれ先づいたゞいて置かねば踏まれぬと咏じたのである。

夜すがらや竹氷らすも今朝の霜

今朝見る霜は昨夜中竹を氷らした霜ぢやといふので、竹籔がありて其邊り一面霜の下りてゐる景色を叙したのである。

から〳〵と折ふし凄し竹の霜

此句は竹籔があつて霜が置いてゐる、それに風が吹いて時々から〳〵と鳴る、其音が物凄く感ぜられるといふので、竹籔の霜に風が吹くといふ景色である。

土屋四友子を送て鎌倉までまかる

霜を踏むで蹇跋ひく迄送りけり

土屋四友といふ人を送つて鎌倉迄行つた。

霜を踏みて足はいたみ遂にビッコを引くやうになる迄でも其人を送つて行つた、といふので、言外に其別を惜む情があらはれてゐる。

稽田に霜の花見るあしたかな

稽田は稻を刈つた其株に再たび小さい稻葉を生じたのをいふ。其の稽田に霜が降つて白くなつてゐるのを花と見て、個樣な景色の旦に出合つたと言つたのである。元來平凡な景色を一寸面白く叙したのは此句の手柄ぢや。

かりて寢む案山子の袖や夜半の霜

案山子は人のやうに作られて破衣を着せられて田畑を守るもの、其の案山子の袖を借りて寢やう夜半の霜が寒いからと旅寢の佗びしさを興じたのである。一寸意匠に才氣があつて面白い句ぢや。

紙衣にも霜や置くかと撫て見し

紙衣とは紙で作つた衣裳で、其頃佗び人のよく着たもの。我が着てゐる紙衣にも霜が置いたであらうかと撫で見た如何にも寒い夜であるわいといつたのである。若し普通の衣服では袖に霜おくは既に陳腐であるが、紙衣と言つた所に生命がある。又撫で見しなどとぼけた所が一寸面白味を感ずる。

杜國が庵を尋ね　(二句)

されば こそ荒れたき儘の霜の宿

されば こそ思つた通りであつた。荒れ放題になつてゐる霜の中の此宿よ、といふので、お前の事なら佗びた住居であらうと思つて居たが果して然りぢやとからかつた心持である。

麥生てよき隱家やはたけむら

麥が生ひ出て來て善い隱家になつた、此の畑村の君の住居はと、い

ふに過ぎぬ。畑村とは畑の澤山ある村落といふ心であらう。麥生ふるとよき隱家とに對し畑村と置いたのは趣がよい。或いは畑村といふ村名かも知れぬが。

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜

葛の葉が表面を見せた、今朝の霜の置いた場合にといふので、裏面を見るが葛の葉の例であるのに、霜の爲めに萎れて居るさまを一寸興じたのぢや。

心地あしくて欄木起倒子へ藥の事いひつかはすとて

くすりのむさらても霜の枕かな

氣分が惡くて欄木起倒といふ人へ藥を下さいと言つてやるとて咏むてふ前書。起倒子は多分醫師なのであらう。

藥をのむで寢るは誠に佗しい、さうでなくても霜の置く夜を寢る事

であるから、といふので既に冬の夜といひ病にふしては一層のわびしさを覺ゆる心を訴へたのぢや。霜の枕は霜夜に寢る事を直ち霜に枕をする如く切實に云ひ做したのである。前書によると是から藥を貰つてのむので現在には未だ藥を飲まぬのであるが、句は既に飲むべき場合として咏じてゐる前書と句との關係に就て初學者の知り置くべき一の例である。

古き代をしのひて

霜の後撫子さける火桶かな

古代の事を思ひやつて咏むといふ前書で、昔しは火桶へ撫子を畫いたといふ事が物の本などに見ゆる、それを思ひやりて既に霜の降る後にも撫子が咲いてゐる火桶よ、昔しは斯樣な火桶があつたのぢや、なつかしく好ましき火桶ぢや昔ぢやと言つたのである。

あらかねの土よりおこる火桶かな

あらかねは土といふ枕詞で、土から起つた火桶であるよといふのぢやから、此の火桶は木で作つたのでなく土で作つた後世の火鉢の如きものであらう、其の火鉢の中に火のおこるのを直ちに土より火が起る火桶であると興じたのである。天地開闢のさまでも思ひよせて興じたのであらう。

少年をうしなへる人に對す

埋火も消ゆや涙の沸える音

少年ぢやから悴を失つた親であらう、或いは又念者の方歟、兎角それを失つた人に對して作るといふ前書で、火鉢に火が埋めてある、其火が消えつゝある、同時に涙が火に落ちて沸ゆる音がしつゝあるといふので、再説すれば其人の少年を失つた悲しさに涙を火桶にこぼして

其涙が火の爲めにジユ〳〵と沸えて、火は消えてしまふであらう、と同情を表したのである。熱涙の沸ゆる音などことは如何にも佗しく悲しく感ぜらるゝ。

きり〳〵すわすれ音に鳴く火燵かな

きり〳〵すが最早冬の事なれば秋の如く絶えず鳴かぬ、唯だ時々忘れたやうに鳴く、折ふし自分は火燵にあたつてゐるといふ事に過ぎぬ。即ち火燵に這入つてゐれば、折々きり〳〵すの音が耳に這入る事よと實況を詠じたのである。

住つかぬ旅の心や置火燵

住つかぬとは火燵の炭に火がつかぬのではなく、落付かぬ一時の住居といふ心持ぢや、兎角住みつきかねるは旅の心である、置火燵して暖まつてゐる此場合にも、といふので、他人の家では何となく勝

手が達ふやうな趣があり、又行く〳〵は再び寒い野山を跋渉せずには濟まぬのぢやとの掛念も現はれてゐる。

硯このむ奈良の法師か火燵かな

硯を愛する癖のある奈良の法師が火燵してゐることぢやといふのみで、少し解し難いが、何か左樣な法師の事實でもあつたのであらう。又火燵にあたりながら頻に硯石を摩滓して居る僧形などは一寸畫にもなる景ぢや。

曲翠旅館

埋火や壁には客の影ほうし

埋火をした火鉢が置いてある、壁を見ると客人の影法師が映つてゐるといふので、灯も餘り明ならず影法師も朧げに淋しく映つてゐるといふやうな趣が言外に在つて、冬の旅寢の有樣がよく現はれてゐる。

五つ六つ茶の子に並ぶゐろり哉

少々難い句であるが、試みに解して見ると、冬の夜などに知人が幾人か爐を圍みて談話をしてゐる、爐には茶が沸き立ち、茶の子として菓子など取よせてあるといふ冬夜の即事で、五六人が爐に並ぶといふ處を茶の子の關係より故らに五ッ六ッと言ひて、人數と菓子の數とを同時に現はした位の心持であらう。

貞德翁の賛

稚名やしらぬ翁の丸頭巾

松永貞德の賛で、稚名や、稚名の事は知るものがない此翁が丸頭巾を着てゐらるゝ姿にはといふので、此の貞德翁は自ら戯れて長頭丸といふ稚名をつけて居つた人、その可笑しき稚名はしらぬ人が多か

らう、今は丸頭巾を着てゐて肝心の長頭も見えぬから、と滑稽的に叙したのであらう。一寸興ある句ぢや。

十二月九日一井亭にて

旅ねよし宿は師走の夕月夜

旅寢をする氣持がよい、折から宿には十二月の夕月夜がさしてゐる、といふ一井亭の即興である。

月しろき師走は子路かねさめかな

月白しは月色が白く眺められるのであるから宵のほどの明かな光りでなく、夜も更けわたりて光りの衰へた有樣である。斯樣な月色のする師走の夜は、孔子の弟子なる子路が眠りよりさめて物憂く考へてゐる其のねさめの頃ぢやと言つたので、古人の場合を現實にして叙したのである。子路は至つて孝行な人であつたが、父母存生中は

貧にして充分に孝養も盡す事が出來なかつた、其の後學問も世に知られて富貴の身と成るに及んでは既に親も世を去つてしまつて孝行したくも出來ず、いたく歎じたといふ事のある人ぢや。それで此句も既に親を失つた子路が目をさまして親の事でも想ひて愁に沈むでゐるといふ心持を現はしたのぢや。且樹靜まらんと欲して風やまず、子養はんと欲して親在らず、といふ古語もあるから、折ふし月白く師走の風が木を鳴らしてゐるやうな景色も連想されるのである。芭蕉翁も親を失ひ身も老いたる後の旅寢には屢〻子路と同樣の感があつたので、此句も蓋自己の感懷を子路に托して歌つたのであらう。

河豚汁や鯛もあるのに無分別

河豚汁や、世間には鯛といふ結構な魚もあるのに毒があるといふ河豚汁を喰ふとはさても〳〵無分別な事ぢや、といつたので、眞面目

になつて理窟を言つたと見ずに、多少滑稽的に言つたとすれば、其間に興の無いとも限らぬ。勿論上乘の句ではない。

ある家に古き奴僕ありて堅く聖の敎へを守る

兄弟のくすしにくむやふくご汁

或家に古く仕へてゐる奴僕があつて、其の奴僕は一生懸命に聖人の敎へを守つてゐる男ぢやといふ前書。

そこに兄弟があつた其兄弟は醫者を憎らしく思つた河豚汁の事に關係して、といふので、即ち河豚汁は毒あるもの、左樣な物を喰つてはなりませぬなどと醫者が八釜敷くいふ所から、面倒くさい小憎らしい醫者ぢや、ナニ仔細があるものか、甘い物を喰はれぬ譯はないなどと兄弟が醫師を憎く思ふとの意ぢや。而して裏面には古き奴僕を醫師と見立てゝ、聖人の敎を堅く守つて物毎に八釜敷く言ふ所から主人達は却て面倒臭く思ふ事だらうと、其奴僕の德を賞した意をはのめかしたのであらう。

桑名に遊びて熱田に到る

あそび來ぬ鮒つりかねて七里まで

七里の渡しとは有名な渡場で桑名と熱田の間に在る入海ぢや、そこで熱田へ遊び乍らやつて來た、其船中で河豚を釣らうと思つたが、釣つても釣つても釣れず、トウ〳〵七里の渡を渡つてこゝまで來ることになつたと言ふのぢや。熱田に於て出會つた人に示した口合の句で、實際鮒釣をしたのではなからう。

雁さわく鳥羽の田面や寒の雨

雁が噪いで鳴いてゐる、其處は京都の南なる鳥羽の田で、其の田には一面に寒の雨が降つてゐるといふので、淋しい客觀の景色を叙し

たのである一寸感じのよい句ぢや。

いさ子供はしりありかむ玉あられ

いざいざ子供等よ是から一緒に走つてあるかうぢやないか、アノ通り玉霰が降つてゐるアノ中で遊んだら面白からう、と子供心にありさうな事を打戯れて言つたのである。芭蕉翁の容體や霰の玉と降るさまも目に入るやうである。

自讃自賛

いかめしき音も霰の檜木笠

いかめしく怖いやうな音ぢや、霰の我が檜木笠へあたる音はといふので、或る旅中の心持を叙し、自己の生涯は斯樣の場合を多く經て來たといふほどの事である。

石山の石にたはしるあられかな

石山は岩石の多い地で、其の岩石の上に落ちて走る霰がはげしく眺められるといふ客觀の景色を叙したのである。石山の石を打つあられの景色は成程面白い場合を見付けた。

膳所の草庵を人々訪ひける時

あられせよあしろの氷魚を煑て出さん

我が住む膳所の草庵を人々が訪ねて來た時に作るといふ前書。想ふに湖邊の無名庵に居つた時と見ゆる。

人々が訪ねて來たから何か饗應をしたいものぢや、それには霰が降れよ、網代で取れる氷魚を煑て出すからといつたので、氷魚を煑ると霰の音を聞くのとは配合に趣味があつて寒夜の情味も深い。

與或人文

冬しらぬ宿や籾する音あられ

冬もしらぬげに住みなした宿である、其宿では籾をすつてゐる、外には霰が降つてゐるといつたので、大勢よつて籾する音は中〳〵勇ましいもので冬の心持は少しもなく外には霰が降つて居ても全く無關係でゐる心持のある處を見付けたのぢや。音あられの五字は一種變つた言葉であるが、籾する音がして居る、そこに霰がふつて居る、といふを略したのであらう。音調のつまつた處が自然と霰の趣に適つて居る。又音の字は何となく下の霰へもかけ合はせたやうぢや。

如行亭にて

琵琶行の夜や三弦の音あられ

琵琶行のやうな夜ぢや、三味の音がして霰れが降つてゐると、冬の夜の淋しくあはれな所より斯樣にうたつたので、琵琶行とは白樂天が潯陽の江頭で客を送り、舟中琵琶を彈ずる古美人に逢つて作つた

歌で、其時の有樣は歌の終りに滿座之れを聞いて皆な泣を掩ふとある如く如何にも哀れに淋しい場合であつたのぢや、如行亭に於て三味の音を聞き霰の音を聞いた夜も丁度此白樂天の琵琶行の夜のやうな趣ぢや、と偶〻思ひ合せたのである。三味の音と琵琶の音とを比して、琵琶行を引ぱり出したのぢやが、或は座中に古娼妓でも居たもの歟。句尾の言葉は前句同斷。

雜炊に琵琶聞く軒のあられかな

雜炊を炊いて喰ひ乍ら琵琶を彈ずる音を聞く折ふし軒には霰の音がすると或日の即興である。雜炊はわびしいもの琵琶も亦た悲壯な音のするもの霰も淋しく、三つの配合が頗るよく利いてゐる。

いさみ立鷹引き居るあられ哉

早やも飛び揚らうと勇み立つてゐる鷹を引するゐる、折しも霰が降つ

てゐるといふので、如何にも烈しい景色を叙してゐる。武士の矢なみつくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原と讀みけん實朝の歌にも劣らず豪壯な句ぢやと思ふ。

落柿舍に鉢たゝきをまちて

長嘯の墳もめぐるか鉢たゝき

落柿舍は去來が嵯峨野の別墅。其處で鉢をたゝいて物乞ひに來る空也宗の僧の來るのを待つといふ前書ぢや。

長嘯は木下と云ひ風雅な隱士であつた、其人の墳も、近處にある所より、佗びたる鉢叩坊主は長嘯にも同情をよせて其墳をめぐり鉢を叩いてゐる事であらうと言つたので、待つ心持を直接に言はず、他の方角の事を叙して間接にほのめかしてゐる處、前書と句との關係を知る一の例句である。

納豆きる音しばしまて鉢叩

納豆きる音が頻として居るが、今ま鉢叩が來たから、それを聞く間納豆の音は暫くまて、差控へゐよといふので、納豆の音も鉢叩の音も共に冬の淋しく佗しき音である所から配合して打興じたのである。

から鮭も空也の痩も寒の中

から鮭は干かたまつた鮭で如何にも淋しく佗びたもの、又た空也は鉢叩の元祖で、痩せさらばうてゐたらしい僧である所より、二つを取合せて、乾鮭も空也の痩せた有樣も皆な寒の中のものぢや、即ち寒中のあはれな景色である、といつたのである。

月花の愚に鍼立ん寒の入

寒の入の寒氣が身にしみる事は恰も針を立てるやうに思はれる、古來人を誡めるを針砭を下すといふより此句の趣向が出來た。常々月

や花ばかり眺めて遊んでのみ暮らしてゐる左様な愚な者には鍼を立てゝやらう、此の寒の入の日に、と言ふので、即ち寒さが鍼になつて氣付けをするといふ意である。而して其實は自己を嘲つたので要するに滑稽の句ぢや。

かくれけり師走の湖のかいつふり

隱れてしまつた、師走の湖に今迄居たかいつふりの鳥よ、何處へ行つたか少しも見えずなつたと輕ろく戯れ興じたので、言外に冬の湖水の景色も現はれて居る。

年くれぬ笠着て草鞋はき乍ら

年も暮れてしまつた、自分は笠を着て草鞋を穿いた旅姿の儘ぢや、と咏歎したのである。世事に關係せずして氣輕な生涯が如何にもよく現れてゐる。蕪村が句の芭蕉死して其後云々の賞賛も宜なる哉ぢや。

自得箴

愛たき人の數にも入らむ老の暮

前書は自得するを惡いと箴めたのでなく、自得すべき爲めの箴めといふ意であらう。

古へを見渡すと愛たい人が數々ある、自分も其數に入つて勝れた人とならう、此の老て後の年の暮ぢや、今の内に一つ大に自立自重せねばならぬわい、といつたのぢやが、是れも理窟を深く言つたのと見ずに、唯だ年の暮ぢや油斷は大敵ぢやと興じた位に見るのぢや。

畫賛

ゆく年や汝か親の小松うり

年が行き去らうとしてゐる、汝の親は小松賣ぢや、といふ丈で、歳

旦の用意の松飾などする所から、行年には松賣が人に注目される、尤も詩的感興としては其松賣て歩く人の風體がをかしいのである。此畫は田舍の小供の遊んでゐる處でも書いてあつたので其小供に對してからかつた心持であらう。

うか〳〵と年よる人や古暦

うか〳〵と年老い行く人間ではあるわい、此の古い暦を見るにつけても、人間は皆な斯樣な有樣で濟んでしまふのぢや、と是れも一時の戯れ言に過ぎぬ。

年わすれ三人よりて喧嘩かな

過去つた一年を忘れて更らに新たなる春を迎ふ可く酒など飲み宴を張るのが年忘れで、其の宴席に三人よつて喧嘩してゐると言ふのである。無頓着に言放つた所に一種の興味がある。諺に三人よれば文

珠の智慧といふ所から、地口的に此句が浮むだのであらう。

煤掃や暮れゆく宿の高いひき

煤掃や、煤掃をして既に日が暮つゝある、其宿で早や人は皆高いびきして寢てゐるよ、と見た儘の人事を叙して打興じたのである。

年の市線香買ひに出はやな

年の市は例の年始に用ふる品を賣る市である。其市へ線香買ひに出て見やうかなア、と言つたので、年の暮で世間は忙しく、俗人は皆な各の營みありてさわがしきに、自分の如き佗び人は是ぞといふ正月の準備もない責めて線香でも買はうかと如何にも氣樂な且つ世と隔つた心持をよく現はしてゐる。

月雪このさはりけらし年のくれ

のさはりとは我が身體を人の前へ投げ出して勝手氣儘にして居る有

樣を言ふので、月ぢやの雪ぢやのと云つて遊びちらかし、世の人に對して勝手氣儘をした事であると、歳末に際して其既往の所行を想ひ、聊か後悔した如くに言つたので、其實は却つて得意の興を歌つてゐる。

旅寢して見しや浮世の煤拂ひ

旅寢して見た事ぢや、浮世の煤拂ひの有樣を、自分は煤拂する家もなくアチコチ歩行いてのみゐるから浮世の煤拂をば餘所に眺める計りぢや、と言つたのである。

旅行

煤掃は杉の木の間のあらしかな

煤掃をしてゐる、一方には杉の木立があつて木の間に嵐の音がしてゐる、といふ客觀の景色であるが、頗る配合が面白い。はと言つた所が此の句を引立てる言葉で、常には何とも感ぜぬが、煤掃する時は杉の木の間の嵐が特に面白く感ぜらるゝといふやうな意を現はしたのぢや。

すゝはきはおのか棚つる大工かな

煤掃の時には自分の家の棚を吊つて居るわい、アノ常は人の爲めのみに仕事して居る大工が、と見た儘を輕く戯れていつたのであるつまらぬ句ぢや。

歳暮の詞

古さとや臍の緒に泣年の暮

古郷での感じだから古さとやとうたひ起して、生れたときの臍の緒を今又見て悲しくて泣いた、此の年の暮に於ける余はと、過去つた父母のことを思ひ、折ふし歳も暮れる處より感慨のやる瀬なかつた

情を叙したのである。歳暮に於て臍の緒などを見れば何人も多少の感慨はあるぢやらうが、殊に芭蕉翁は一所不住旅より旅へさまよひあるき、多年雲水に身をまかせて、會〻故郷へ歸れば父母既に亡しといふ境涯であるから、一層感慨が深かつたに相違ない。而かも此の感慨は倫理上の理窟にあらで、唯だ人情の自然を吐いたのである。から、尚ほ詩的範圍を離れぬのである。

ぬす人にあふた夜もあり年のくれ

盗人に出會ふた夜もある、年の暮に、といふだけの事で、紙衣の一枚も盗まれたのであらう。

何にこの師走の市にゆく烏

繁忙な師走の市中で向ふを見ると、烏が飛び行きつゝある、何事の爲めに行くのか、汝も何か用事があるのか、左樣の柄でもないぢやないか、と言つたので、即ち師走の市に何の爲め行きつゝあるか鴉共よといふのを言葉に曲をつけたまでゝある。

五百丸へ元服の祝として

春や立また春を見む此師走

春や立つ、即ち春が立つのであるか、左すれば是れより又春の美しいけしきを見る事であらう、此の師走から思ひまたれる事ぢや、といふので。元服したのを春の立つことに比して、前途の立身出世を豫め祝する意を叙したものぢや。

節季候の來れは風雅も師走かな

節季候がやつて來た、そを見ると風雅の世界も早や師走になつたのぢやと云ふのである。勿論節季候も風雅の物と見做したのぢや。

行脚の五器一具浪花に殘し置たるを年經て路通が送りける

を

是や世の煤に染らぬ古盒子

行脚の時に持ち行く五器一揃を浪花へ殘して置いたのを、年經て後ちに路通といふ弟子から送つてよこした。それで作るといふ前書。是やは古盒子を指し、浮世の煤などには少しも染まぬ古盒子ぢや、久しく見なかつたが、不相變依然として我が食器の面目を保つて居ると言つたので、聊かの痛みもなかつたと謝した意を含んでゐる。

洛の御靈別當景桃丸興行

半日は神を友にや年わすれ

京都の御靈神社の別當の役をしてゐる景桃丸といふ人の俳諧興行の席でといふ前書ぢや。

日半日は神樣を友として年忘の會をする事である、變つた趣で有り難い會ぢやといふだけの事で、別當が神に仕ふる人なるより其會も亦た神社近くかなんかで催したので、神を友とするといふ趣向を立てたのであらう。

また埋火の消えやらず臘月末京都を立出で乙州が新宅に春をまちて

人に家を買はせて我は年わすれ

芭蕉翁自分の宿處は常に埋火をして居るが其火の未だ消えしまはぬ十二月の末に京都を立出で、門人乙州の新宅で春を待つてといふ前書で、歳未だ暮切らぬといふ事を埋火の消えやらぬであらはしてゐるのぢや。

他人に家を買はせて置いて、自分は其新宅で年わすれをする、我儘勝手なズルイ自分ではあると戯れたのである。

魚鳥の心はしらす年のくれ

魚や鳥は如何樣な心持でゐるのか知らぬ、此の年のくれつゝある場合にはと、魚や鳥に對し戯れたので、其實は自分が冬籠をして居て近來魚鳥と隔つて居るが、彼等は今頃如何な有樣だらうかとの意を叙したのである。一本には年の暮を年忘としてあつて、何丸は方丈記を引いて閑居の意味を述べたものぢやとして居る。參考。

ゆく年やくすりに見たき梅の花

年がゆく、梅が見たい、梅は未だ咲かぬ、若し見たら心が慰むであらう、藥になるであらう、藥にする爲めに見たいものぢや、梅の花よ早く咲けかしといふ程の意で、中七が工夫の存する處であらうが、餘り面白い句ぢやとも思はれぬ。

せつかれて年わすれするきけんかな

忘年會を致さう〳〵と人から迫られて遂に此會をすることになつた、師弟朋友一致熱心の會で、誠に上々吉の機嫌である、といふので、當時蕉門の情況がよく現はれて居て余も亦機嫌を感ずる句ぢや、

蛤の生けるかひあれ年のくれ

蛤の生きて居た甲斐もあれ、此年の暮に逢ふことよ、と蛤貝に代りて何となく歌つたやうであるが、其實は自己の猶生きながらへて居ることを幸として、世をば未だ思ひ捨てざる心を表はしたのである。隨て蛤貝に就ては殆ど無意味で、下のかひあるといふべき緣語に用ひたのみと見て好いのぢや。尤も年末は諸祝儀事も多く蛤貝は取分け需用せられる故それをいつたものと解すれば、解せられぬこともないが、頗る詩味に乏しい句にならう。

素堂亭年忘

節季候を雀のわらふ出立かな

節季候を雀が笑つてゐるが成程其出立が如何にも可笑しいわいと、雀の心を思ひやつたのである。想ふに雀躍りの風體が編笠などを着て、恰も節季候に似てゐる所から連想して此の趣向を立てたのであらうか。尙ほ實際忘年會席上に於て種々の餘興もありて、其趣のをかしかつた事を節季候に事寄せて打興じたものとも思はれる。

分別の底たゝきけり年のくれ

あらん限りの底の底まで分別をたゝき出した此年の暮にといつたので、勿論滑稽ぢや。眞面目に苦勞する由を訴へたとしては殺風景。

有明も三十日にちかし餅の音

追々月も末になつて、有明の月影も早や三十日近くなつた、折から何れの家かに餅搗く音がするといふので、夜あけの月下に餅を搗く

歳末の景況如何にも勇ましく心地よい。

海ある處に束ねたる柴を繪書て

須磨の浦の年こり物や柴一把

一方に海がある其濱邊に柴の束ねて置いてある處を繪がいて、それへ此句を題すといふ前書で、畫にある海を須磨浦と見なし、此浦人の年をとり即ち春を迎へる用意の物は唯柴一把ぢやと、蜑が家の氣樂な境界をうたつたのである。

くれ〳〵て餅を舂のわびね哉

年も早や次第にくれ〳〵て餘所に餅を搗く音を舂と聞いて自分はわびしく寢てゐる、依然たる貧生涯で此年もくれるといふ位の事ぢや。

みな拜め二尺の七五三を年の暮

年のくれに芭蕉翁の庵も一寸した七五三を張つたのと見ゆる。それを興じて皆な拜めよ、二尺の七五三を張つてゐるぞよ、此の年のくれにと、如何にも業々しく言つて其佗生涯を自ら笑つたのである。

無季の部

かちならは杖突坂を落馬かな

實際旅中に馬をかりて杖突坂といふを上るとき誤つて落馬したのと見ゆる。其處で其坂の名から徒歩だつたら杖をついて上る坂である可きを、馬に乘つた爲めに、落馬をしたと時に取つての興を叙したのぢや。

朝よさを誰松島そ片こゝろ

朝起きて氣分のよい處から松島の景を眺めた、實に怡々如たる心持ぢや、此心持は誰れを待つうれしみであらうか、其實誰れも來るのでない、自分丈の思ひ即ち片心である、と云つたのである。誰れ待つと松島とは無論かげ言葉ぢや。

酒のみ居たる人の繪に

月花もなくて酒のむ一人かな

月もなく花も亦たなく、唯だ一人ボチで酒をのむでゐるといふので、グビリ〳〵と獨酌してゐる人間が目に入り來るやうぢや。

貞徳宗鑑守武の畫像

三翁は風雅の天工をうけて心匠を萬歳に傳ふ此かけに遊はんもの誰か俳意をあふがざらんや

月花のこれや誠のあるじたち

貞徳宗鑑守武三人は何れも連歌俳諧師である所から、三人の翁は風雅の天の工を受け得てゐる天才で、心の匠みの跡を萬歳の後まで傳へてゐる、此の三人の蔭に遊び俳諧の流をたどる者は誰一人として三翁の俳諧の極意をあふぎ尊まぬものがあらうや、決してないとの

序文。

月や花の誠のあるじ達ちは此三人である、月花は此三翁のものとなつてゐると誇張して言つて、苟も風雅に遊ばんもの皆な此三翁をたふとむべしといふ意をほのめかしたのである。

題　花生

此槌のむかし椿か梅の木か

花生けが槌の形ちであつたと見ゆる、其處で此の槌のやうな花生けの前世は何の木であつたか、椿の木だらうか、梅の木だつたらうか、といふ意を表面は直ちに槌と呼んで戯れたのである。

四山の銘

物ひごつ瓢はかろき我世かな

芭蕉の持つてゐる瓢に山口素堂か銘をして、其銘文中に四ッの山の

字がある處から、其の瓢を四山と言つたと、芭蕉翁の文に見えてゐる。それに就き更に一句をものしたので、我が宿には物一ッのみぢや、それは瓢簞で、此外何の重荷もない、誠に身輕く氣の安い我が世即ち我が生涯ではあるといつた。輕くの二字は瓢簞と我が世と双方へかゝつて居る。此句を讀み去れば我人共に塵界を蟬脱するが如き想ひがする。實に愉快な句ぢや。此集の結末大に振ふといふべきである。

布袋畫賛

ものほしや袋の中の月と花

布袋の畫の賛で、布袋は大袋を持つてゐるところから、ア、物がほしい、アノ袋の中にある物、即ち月と花とがほしい、と打興じたので、布袋の大きな袋に就きたはむれた處が一寸面白い。

秋冬

芭蕉俳句評釋

畢

明治三十七年六月二十五日印刷
明治三十七年六月二十八日發行

著作者　内藤素行
發行者　岩崎鐵次郎　東京市神田區鍋町二十一番地
印刷人　齋藤章達　東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社　東京市日本橋區兜町二番地

著作權所有

發兌　東京市神田區鍋町二十一番地　大學館
電話本局三〇六七番

芭蕉俳句評釋
正價二十錢

佐々木信綱先生閲　千勝義重先生著
類題萬葉短歌全集
紙數四百五十頁　價二十五錢　郵税四錢
◎萬葉集は萬葉假名と稱する文字を以て書かれたれば閲讀に非常の苦心を要す依て本書は萬葉假名を普通假名文字に改めて研究者の便益を圖れり。
◎萬葉集は類題を設け集められたるため參考上不便の感ある故本書はこれを四季、戀、雜の三編に分ち更にこれを諸部類に細別したり。
◎本書は紙質印刷に吟味を加へ袖珍に裝釘せられし等携帶に甚だ便利なり。
◎萬葉短歌四千餘首は悉く本書に載せられたれば新派舊派を問はず歌道に志ずものゝ右座の寶典なり。

佐々木信綱先生閲　千勝義重先生著
西行法師山家集評釋
價二十錢　郵税四錢
目次を摘記すれば法師の略傳、俗になりし時の法師、脫俗後の逸事、當時の歌壇に於ける西行、西行自身の歌に對しての考、西行の詞藻、西行法師の自作歌、閑散清逸の氣に富める歌、幽韻高致なる歌、纖麗巧緻なる歌、とりぐにをかしきもの、戀の歌の面白きもの等を擧げ且つ歌調を評し語句を釋き、春夏秋冬、戀、無常、神祇釋教、祝賀、贈答悉く正確なる原本に依つて最も平易に全編を評釋す。

俳句入門叢書

第一編 **俳句獨習** 價二十錢 郵税四錢
内藤鳴雪翁著 再版

第二編 **燕村俳句評釋** 價二十錢 郵税四錢
佐藤紅綠君著

第三編 **其角俳句評釋** 價二十錢 郵税四錢
河東碧梧桐君著

第四編 **春夏芭蕉俳句評釋** 價二十錢 郵税四錢
内藤鳴雪翁著

第五編 **秋冬芭蕉俳句評釋** 價二十錢 郵税四錢
内藤鳴雪翁著

第六編 **新選俳句歲事記** 價二十錢 郵税四錢
寒川鼠骨君著

94
199

94
199